第五回　平成二十六（二〇一四）年九月二十日

「西宮雅楽多宗」の人々（一）戦前編―趣味人ネットワークの成立・展開―

山内　英正（やまうち・ひでまさ）

はじめに

私は西宮のセミナーや公民館講座で、普段は主として『万葉集』の講座を担当しておりますが、実は歴史学が専門で、甲陽学院に勤務してからは教育史や地域史に関わるテーマに取り組んできました。『万葉集』は大学入学以来、私の恩師の犬養孝先生（万葉学者、晩年は西宮在住）の傍らで、門前の小僧として学び、『万葉 こころの風景』（和泉書院、二〇一一年）や『犬養孝揮毫の万葉歌碑探訪』（犬養と共著、和泉書院、二〇〇七年）などを上梓しています。そのため国文学専攻と間違われることもあります。歴史学と文学は繋がりがないようで、実はあるのです。歴史は事実の真実を探求し、文学は心情の真実を探求しますが、この二つの真実は互いに絡み合いながら、その時代のその出来事を理解する視点となるのです。恩師からこのことを学びました。

今日は、主に西宮で、戦前から戦後にかけて、自由闊達に、そして批判精神と遊び心を持った地域の人々の戦前編のお話をします。その結社は「西宮雅楽多宗」と言いました。この存在は西宮では忘れられ

た存在でした。二〇〇三年に京都の「書林かみかわ」から、私がいただいた古写真九十五葉の中に、「西宮雅楽多宗」関係の写真が少なくとも二十六葉あったのです（末尾の追記（1）を参照）。当初この団体のことは分からなかったので、現在、私が評議員を務めている「白鹿記念酒造博物館」に解明の糸口が見つかるかもしれないと思って、同館で調査しました。当時、研究員であった寺岡武彦氏の協力を得て、「西宮市笹部桜コレクション」（同館寄託）の中に、戦後の例会案内葉書があることが判明しました。しかし戦前の資料はありませんでした。

早速「レトロ絵はがき　世相くっきり」（『朝日新聞』二〇〇四年一月十七日、夕刊）として紹介され、寺岡氏からこの話を聞かれた須崎慎一氏（神戸大学教授）が大変関心を持たれ、これらの葉書案内について「戦後意識を探る　「西宮雅楽多宗」ハガキ通信を手がかりに」（『日本文化論年報』第十一号、二〇〇八年）として紹介し、執筆・編纂担当の『西宮現代史　第三巻　社会・教育・経済資料編』（西宮市、二〇〇四年）と『西宮現代史　第一巻Ⅱ』（西宮市、二〇〇七年）に一部紹介されました。私はこれらのために資料を提供いたしました。こうして西宮市の〝正史〟の中に「西宮雅楽多宗」が位置づけられることになったのです。なお、私も「『西宮雅楽多宗の鈴塚』について」（『土鈴愛好家の足跡と鈴塚　神戸土鈴友の会二十周年記念特別号』、神戸土鈴友の会、二〇〇六年九月）、「『西宮雅楽多宗』の写真史料について」（『琛』第一五一号、神戸土鈴友の会、二〇一四年一月。拙著『歴史とともに―私記録―』、漫沃書房、二〇一四年に所収）などの論考を著しています。

私が「西宮雅楽多宗」に辿り着いたことには、前史があります。夙川河口近くの中葭原町（なかよしはらちょう）に現在、甲陽

学院中学校があります。同地には昭和二十三（一九四八）年三月末まで、甲陽高等商業学校（のち時局の要請によって甲陽工業専門学校に転換）があったのです。その図書館の書庫の中に瓦や土器などの考古遺物が保管されていました。私はこれらの遺物が、戦前、大阪の大蒐集家の趣味人、三宅吉之助のコレクションの一部であることを突き止めました。甲陽高等商業学校の保護者から寄贈されたという伝承がありますが、その過程は今も不明です。そして私は考古学者の黒田慶一・矢野健一の両氏や辰馬考古資料館の協力を得て、『甲陽学院所蔵　旧「宇津保文庫」考古資料目録　瓦編』（学校法人辰馬育英会甲陽学院高等学校・中学校、一九九八年）、『甲陽学院所蔵 旧「宇津保文庫」考古資料目録　土器編（瓦類補遺）』（二〇〇〇年）を刊行しました。三宅吉之助は大阪のありとあらゆる趣味団体に加わり、家督を継いでからは不労所得で趣味人、文化人として生涯をおくった人です。笹部桜コレクションの笹部新太郎と同じです。三宅が属していた様々な趣味団体に、「西宮雅楽多宗」の一部の人々も加わっていました。「類は友を呼ぶ」の世界です。戦前、横浜市には『いもづる』という機関誌を出していた趣味人の団体がありましたが、現代風に言えば、「いもづる」はネットワークということになるでしょう。

さて、「趣味」とは何ぞや。比較的新しい『新明解国語辞典』（三省堂）には、次のように書いてあります。①「そのものを深く知ることによって味わえる独特の良さ」、②「利益など考えず、好きでしている物事」、③「選んだ物事や行動の傾向を通して知られるその人の好みの傾向」。①は色々なものを集めているうちに、集めるだけではなく、もっと奥を深めたい、研究したいと思うことです。そして知れば知るほど楽しくなっていくのです。②は実学とはほど遠い人文系、教養系の学問についても言えることで

す。金儲け、実利の対極です。金銭が大変かかる趣味もあれば、ほとんどかからない趣味もあります。③は「あなたのネクタイの趣味は良い。」というような意味あいです。一般には①と②の意味あいで使います。

一、戦前の「西宮雅楽多宗」の活動

大正時代の半ば頃から昭和の始めにかけて、全国各地に爆発的に様々な趣味人の団体、グループが誕生しました。もちろん江戸時代にも江戸・大坂・京都・長崎のみならず、学芸・文化を尊ぶ諸藩の都市にも、様々な結社がありました。

「西宮雅楽多宗」は大正五（一九一六）年五月五日午後五時五十五分に、音馬福蔵宅（西宮市本町八〇）で結成されました。大正時代から西宮神社の門前周辺に住まう人々の交流の中から、自慢の蒐集品の見せ合いや懇親を深める活動を不定期で始めていたと推測されます。それを定期化したのです。『西宮新聞』（昭和二十八（一九五三）年八月十五日）には、永井清司の紹介記事に、「雅楽多宗とは大正時代からある西宮の名物である。」と記されています。結成される以前に前史があったことが窺えます。

「雅楽多」は「雅な楽しみ多し」と洒落ているのですが、「がらくた」は普通「瓦落多」を借字とします。『新明解国語辞典』には「その人にとっては価値のない雑多な道具（品物）」とありますが、そのような物であっても、蒐集している人、それに愛着している人にとっては、「がらくた」ではありません。甲陽学

院の書庫にあった瓦は「瓦落多」故に、私の目に留まるまで誰からも忘れられていたのでしょう。一生懸命に蒐集しても、本人が亡くなれば打ち棄てられることもあり、散逸することもあります。価値なきものと見なされたものでも、後世に文化財、生活財などとしての資料的価値が出てくる場合もあります。

大正年間から昭和にかけて、東京には「我楽他宗」と称した団体がありました。当初は「我楽多宗」と称していました。この団体は三田平凡児（林蔵）が中心になってつくられました。大阪では大正の終わり頃に「道楽宗」というグループができます。私はこの大阪グループの珍しい資料も所蔵しています。西宮の「雅楽多宗」もこれらに触発されて結成されたのでしょう。

「雅楽多宗」の宗員数は西国三十三札所巡りになぞらえて、三十三人です。もちろんこの周りには宗員ではない同好の士がいます。欠員が出れば入るのです。結成時の宗員の氏名と宗員番号の対応は、まだほとんど判明していません。私が所蔵する宝物展覧会の記念合同写真の記章の宗員番号や、個人写真に写っている宗員番号から一部が判明しています。

「道楽宗」は希望者が多くいたので、「別院道楽宗」や「新道楽宗」もでき、三十三人×三＝九十九人にも宗員がいました。

「雅楽多宗」の戦前の活動をまとめると、次のようになります。便宜上、行事の開催年月日を各項目の冒頭に記し、私が所蔵している記念写真があるものには※印を付けました。日付の空白は、戦災で記録帳が失なわれたため生じました。甲子の日なので推定することはできますが、空白にしておきました。

（　）内は行事が行なわれた会場です。

昭和五年五月五日午後五時五十五分
「西宮雅楽多宗」開創（音馬福蔵宅）
昭和五年八月八日
※第一回宝物展覧会（西宮市立幼稚園）
昭和六年四月
第一回甲子展（浄願寺　現、西宮市津門呉羽町八―三二）
昭和六年十月十一日
※第二回宝物展覧会（西宮市公会堂）※武庫郡公会堂
現、西宮市勤労会館の場所
昭和六年十月十一日か
※第二回宝物展覧会懇親会（西宮市役所地下食堂）
昭和七年四月
第二回甲子展（浄願寺）
昭和七年十月九日
※第三回宝物展覧会（西宮市公会堂）
昭和八年四月
第三回甲子展（浄願寺）
昭和八年十月八日
※第四回宝物展覧会（西宮市公会堂）
昭和九年四月
第四回甲子展（浄願寺）
昭和九年五月十三日
※西宮郷土鈴頒布
昭和九年十月二十八日
※第五回宝物展覧会（西宮市公会堂）
昭和十年四月
第五回甲子展（浄願寺）
昭和十年十月二十日
※第六回宝物展覧会（西宮市公会堂）
昭和十一年四月十二日
第六回甲子展（浄願寺説教所、西宮市戸田町六―二六）
昭和十一年十月十一日
※第七回宝物展覧会（西宮市公会堂）
昭和十二年四月七日
第七回甲子展（浄願寺説教所）

昭和十三年四月二日　第八回甲子展（浄願寺説教所）
昭和十四年五月二十七日　第九回甲子展（浄願寺説教所）
昭和十五年五月二十一日　第十回甲子展（浄願寺説教所）
昭和十五年八月四日　※鈴塚建碑除幕式（浄願寺説教所）
昭和十六年五月十六日　第十一回甲子展（浄願寺説教所）
昭和十七年四月　第十二回甲子展（浄願寺説教所）
昭和十八年四月　第十三回甲子展（浄願寺説教所）
昭和十九年四月三十日　第十四回甲子展（浄願寺説教所）

毎年行なわれた最大の行事は宝物展覧会だったので、毎回、記念の合同写真がプロの写真屋によって撮影されました。会場は、第一回は西宮市立幼稚園でしたが、第二回からは西宮市公会堂が使用されました。各写真の裏には鉛筆書きで、撮影年月日もしくは年月が書かれています。第七回のものには「西宮にお別れ記念」と鉛筆書きされています。写真の所蔵者が転勤などの理由で、以後、雅楽多宗の活動に参加できなくなったためかと、当初思っていました。白鹿記念酒造博物館に寄託されている堀内泠（きよし）コレクションの中に、その事情を物語る資料が見つかりました。雅楽多宗の中心的役割を果たしていた浅田耕一郎（柳一）が、昭和十一（一九三六）年十月十一日に催された第七回宝物展覧会が終るとすぐに、ドン＝キホーテを気取って「鮮満観察の旅」に出かけました。その「お別れのことば」の葉書が、十月十六

日午後二時、敦賀出航の「さいべりや丸」から雅楽多宗の宗員らに出されています[1]。浅田は西宮空襲でコレクションをすべて焼失しました[2]。私が所蔵している写真は、第七回宝物展覧会が浅田の送別会を意識していたことを物語っています。インターネットを検索していますと、浅田が「渡満記念」の品として作った土鈴が見つかりました。京劇俳優の顔の裏に「渡満記念　耕一郎」と記しています。

戦前の宝物展覧会はこれが最後で、戦後の昭和二十一（一九四六）年五月五日になって、第八回ではなく番外扱いの宝物展覧会が「戦災趣味品追悼祭」として行なわれます。昭和六（一九三一）年九月十八日に始まった満州事変は中国民衆の抵抗を招き、昭和十二（一九三七）年七月七日に日中戦争となり、戦争は泥沼化していきます。浅田がいつ帰国したか不明です。浅田の不在に加えて日中戦争開始が、宝物展覧会の中断の理由です[3]。

毎年行なわれた甲子展は西宮の甲子園球場の甲子に因んだ洒落でしょう。四月の甲子の日に浄願寺で、昭和十一年の第六回からは同年竣工した浄願寺説教所で、仲間内で小規模に行なわれたのです。それも昭和十九年をもって休止となりました。

なお、拙稿「『西宮雅楽多宗の鈴塚』について」を脱稿したのち、鈴木博久氏（神戸土鈴友の会会長）から私に次の①～⑥の資料コピーが送られてきました。私はそれらを拙稿追記として紹介しました。一部前述の繰り返しになりますが、その要点を記します。

① 「第七回雅宝展御案内」昭和十一年十月十一日、西宮市公会堂で開催。

②「第七回甲子展御案内」昭和十二年四月七日、浄願寺説教所で開催。

③「好鈴に因る『七つの宝の鈴』御案内」昭和十二年一月十二日、浄願寺説教場（所）で開催。「鈴」は「鈴会（例会）」の意味か。

④「宝船入港歓迎会案内状」昭和十一年三月八日、順心寺（西宮市産所町）で開催。

⑤「西宮五鈴会案内」昭和十一年六月七日、西宮神社境内拝殿南側茶店で開催。

⑥「西宮五鈴会案内」昭和十二年五月二十三日、西宮神社境内拝殿南側茶店で開催。

戦前においても、雅楽多宗の甲子展や宝物展覧会の折には、案内状が出されていたことが証明されました。①・②・③とも当日、この案内状を持参した者には土鈴が記念品として頒布されました。②は雅楽多宗有志の音馬福蔵・川西空彌・多喜幸三郎・永井清司・永井長兵衛・牧金逸（壽太郎）・小塚六八の連名で出されています。③は井上三千雄・多喜幸三郎・橘彌三郎・永井清司・中川京三・阪口淳（打出焼二代目阪口砂山）・宮本圓心の連名で出されています。④は「西宮五鈴会」の会員五人に、二人加えた合計七人の連名で案内状が出されており、記念土鈴の頒布のほか、福引で大黒天立像が景品となっています。雅楽多宗の有志の間で、土鈴の製作頒布は意外と早くから始まっていたことも判明しました。

二、雅楽多宗の宗員

発足時の宗員と宗番（札所番号）の対応は未だ確定できていません。第一回から第七回の宝物展覧会やその他の記念写真に写っている人物で、氏名が判明している者もいます。宝物展覧会の記念撮影写真の人物のうち、胸に付けた記章の漢数字の宗番が読み取れたものには、その番号を記しました。ルーペで読み取ろうとしましたが、読み誤りがあるかもしれません。七枚の宝物展覧会記念撮影写真に写っている人物の数は、三十三人ではなく十一～二十二人です。

戦後の宗番は、「雅楽多宗宗意」（昭和二十三（一九四八）年十月）、「雅楽多宗三十三所めぐり・第十回宝物展覧会」（松坂屋出開帳一覧の四枚組み葉書、昭和二十四（一九四九）年二月一日～十三日）、「西宮雅楽多宗三十三巡拝帳」（納経実印完成押捺会の朱印帳、昭和二十六（一九五一）年五月二十日）で判明していますが、この三種にも当然のことながら差異があります。昭和二十三（一九四八）年十月の時点で、十二人の物故者名が挙げられています。この十二人は昭和五（一九三〇）年の結成時の宗員であったとは断定できません。

第一回宝物展覧会の記念写真（写真1）で、判明している人物名を記すと、次のようになります（以下、不明な場合は□で表記）。前列左から永井清司・永井長兵衛・□。中列左から□・音馬福蔵・牧壽太郎・多喜幸三郎（十三番）・木村幽名（立っている人物）。後列左から藤井治三郎・勝部正造・□・宮本圓心・□（九番）・浅田柳一・□（二十五番）・喜田新介・中川元三郎。これらの人物名は、平成十六（二〇〇四）年末、

永井清司子息の奥様から御教示を得たものです。

さらに平成二十五（二〇一三）年十月、埼玉県在住の喜田綾子さんが祖父の喜田新介（号、暉哉）の事績について調べたいと、白鹿記念酒造博物館に訪ねてこられました。学芸員の弾正原佐和さんから連絡があったので、写真史料のコピーを送付したところ、返信で喜田新介を特定することができました。彼は昭和十（一九三五）年四月二日に没していました。上記の第一回・第四回の宝物展覧会、西宮鈴頒布記念、第五回宝物展覧会の記念写真には写っていますが、第二回・第三回の宝物展覧会の記念写真には写っていません。その理由は、昭和六年と七年は、家族に不幸があったため、取り込み事が多く、趣味に心をかける余裕がなかったためだろうと、綾子さんは言われました。西宮の戦災で祖父の写真はすべて焼失していたので、大変喜ばれました。

（写真１）
第１回宝物展覧会

以下、煩雑になるかもしれませんが、将来もっと雅楽多宗のことを解明するため、戦前の宝物展覧会の写真の中で、判明している人物名を紹介しましょう。

第二回の宝物展覧会記念写真（写真2－1）は、前列左から□・中川元三郎・多喜幸三郎・音馬福蔵・永井清司・川西空彌・□・浅田柳一・□・松井如奏・高山岩三郎。後列左から□・□・藤井治三郎・□・□・□・□・永井長兵衛・□・宮本圓心・木村幽名。（写真2－2）は、服装から判断して第二回宝物展覧会の懇親会の写真です。戦前の西宮市役所地下食堂の貴重な証言写真です。左一番手前は高山岩三郎。その左後ろが宮本圓心、その後ろに立っているのが牧壽太郎。テーブル左側から□・浅田柳一・木村幽名・永井清司・□・牧壽太郎・□・松井如奏・以下不明。右一番手前は中川元三郎、その後ろが藤井治三郎、その後ろの顔が多喜幸三郎、中川の右は音馬福蔵。

「写真2－1」の前列の人はそれぞれ自分のコレクションを手に持っています。ビクターのニッパーという名前の犬の置物、郷土玩具の馬、宝船の模型、五段重ねの杯、達磨、大きな土鈴、信楽焼のタヌキ、虎の置物など、自慢の品なのでしょう。鬼の面を被っている人もいます。

第三回宝物展覧会記念写真（写真3）は、人物は特定できませんが、胸の記章の宗員番号が読み取れるものがあります。前列左から中川元三郎・川西空彌。中列左から永井清司・木村？・多喜幸三郎（五番）・音馬福蔵・高山岩三郎・松井如奏（十八番）、後列左から□（二十五番）・木村幽名・浅田柳一（三番）・□（九番）・□（十九番）・牧壽太郎・□・永井長兵衛（十三番）・宮本圓心。永井は獅子舞の頬被りをしています。松井如奏は松尽くしで、松壽山錦宝寺と名乗っていました。

（写真２-１）
第２回宝物展覧会

（写真２-２）
西宮市役所地下食堂

第四回宝物展覧会記念写真（写真４）には、前列右端に「摂津西宮　雅楽多宗」の宗旗が写っています。第五回宝物展覧会記念写真（写真５）には「西宮雅楽多宗　第五回宝物展覧会記念」、第六回宝物展覧会記念写真（写真６）には「西宮雅楽多宗　第六回宝物展覧会々場」、第七回宝物展覧会記念写真（写真７）には「西宮雅楽多宗　第七回宝物展覧会」の立て看板が左端に写っています。これらの写真によって、私が「西宮雅楽多宗」の存在に気がつき、笹部桜コレクションにも戦後の資料があることが判明し、忘れられた存在が甦ることになったのです。

第五回宝物展覧会記念写真（写真５）には、前述したように喜田新介が再び登場しています。最前列の一人は川西空彌、二列左から□（二十二番）・多喜幸三郎（五番）・□（十四番）・宮本圓心（三十三番）・中川京二（三十二番）、三列左から音馬福蔵・

（写真３）
第３回宝物展覧会

（写真４）
第４回宝物展覧会

（写真５）
第５回宝物展覧会

（写真６）
第６回宝物展覧会

（写真7）
第７回宝物展覧会

永井長兵衛（十三番）・喜田新介（二十五番）・□（□十一番）・□・牧壽太郎・□（二十八番）、四列左から浅田柳一・□（九番）・木村幽名・□・□（□十一番）・永井清司・勝部正造（十番）。

第六回宝物展覧会記念写真（写真6）には新顔の人物が写っています。前列左から□・勝部正造（十番）・□（二十八？番）・多喜幸三郎（五番）・□・□（十四番）。中列左から小林好燐（十六番）・□（二十五番）・永井長兵衛（十三番）・□・永井清司・□・河西空彌・宮本圓心。後列左から木村幽名・浅田柳一・□・音馬福蔵・高山岩三郎・□・□。公会堂の建物の中に少女と老爺がいます。少女は誰かの孫かもしれません。

第七回宝物展覧会記念写真（写真7）は、前列左から勝部正造・□（壱番）・□、中列左から□・□・□・川西空彌（十□番）・永井清司（十九番）・宮本圓心（三十三番）。宮本の左右の後ろは□・□。後列左から□・高山岩三郎・永井長兵衛（十三番）・多喜幸三郎・音馬福蔵・浅田柳一・小林好燐・□・□。

第七回の時には木村幽名・牧壽太郎・喜田新介などは物故者となっていたので、新宗員の追加もあり、ずっと活動していた者にも宗番の移動変更があったと思われます。写真から読み取れる宗番を単純に合算できませんし、戦後の三種の宗番の人物を当てはめるわけにもいきません。浅田柳一（三番）・勝部正造（十番）・永井清司（十九番）・宮本圓心（三十三番）の四人は、結成時から解散時まで一貫して同じ宗番であったと断定して間違いないでしょう。結成時に比較的若かったことがその一因でしょう。

次に、宗員のうちの代表的な人物を紹介しましょう。永井清司の写真（写真8）は戦後、晩年のものでしょう。写真の裏に「粋な湯上り姿」と鉛筆書きしてあります。手拭いの蒐集家としても有名でした。

西宮市公会堂（現在の西宮市勤労会館の場所）の道路を挟んだ南側に、屋号「大半」という菓子輔を営んでいました。『西宮新聞』（一九五三年八月十五日）の記事に、「戦前までは珍品珍本を蔵し浮世絵は其の有名なものであったが戦災で無くしたのは御本人よりも他人が惜しがっている。戦争中は食料品組合理事長として特に甘党関係の総大将をしていたが。戦災後は松原天神前で玄関に古瓦のかけらを積んで、毎日絵をかき、廃物利用の工作に余念がない。旧市（西宮町時代）の思出を絵画図表にして製作して一々当時の風物人情を説明し後世に残すことを楽しみの一つとしている。西宮の大先輩でもある。本家の最中は西宮の名物であるが今は店頭にない、特に昔の味を思い出して頼めば製菓してくれるが、広告をしないから知る者の外は忘れているだろう。」とあり、本人の似顔絵も描かれています。永井は多趣味な人で、雅楽多宗の宗員の中で、大阪や神戸など趣味人の様々な結社と最も関わりがありました。雅楽多宗の宗員の中にもその影響を受けて、それらの結社に参加する人も出てきました。逆に神戸在住の小林好燐のように、他所から雅楽多宗に参加する人も出てきました。絵も得意で彼の描いた絵が西宮市に寄贈されていると、御遺族からお聞きしました。戦後の山号寺号が「毛納香山買俄寺」であったことが、それを物語っています。現在は最中の製造販売はしていませんが、甘党の私は何度か最中を買いに行ったことがあります。入り口の扉の前に「最

（写真８）
永井清司

中あります」の木札がかかっていました。中に入ると壁に瓦が一つ嵌め込まれていました。私は当時の包み紙二種類を持っています（写真９）。

雅楽多宗のもう一人のキー＝パーソンは浅田耕一郎でした。彼は奥さんが年上だったので、若い燕を気取り、燕に柳はつきものということで浅田柳一と称しました。明治三十六（一九〇三）年に西宮市本町の浅田印刷所の長男として生まれたので、戦前、彼自身の宝船の印刷などに同印刷所が腕をふるったのです。新聞記者となり、昭和二十三（一九四八）年八月に尼崎市西字口ノ開（くちのびらき）一六七に転居し、昭和五十四（一九七九）年に亡くなりました[4]。彼は最初、ダルマの蒐集家でした。「写真10」の胸の記章が第二回宝物展覧会の記念写真の各自の記章と同じであり、裏に「六、一〇」と鉛筆書きしているので、昭和六（一九三一）年十月十一日に行なわれた第二回宝物展覧会の会場出展記念写真と断定できます。浅田は戦災でコレクションが焼失したので、戦後は昭和十九（一九四四）年頃から始めていた瓦の蒐集に執念を燃やしました。西宮に関する著述としては『酒都遊観記・酒都歳時記』（合

（写真10）
浅田柳一

（写真９）
「大半」包装紙

著／飯田寿作・浅田柳一、酒都遊観記刊行委員会、一九七四年）、『なにわ歳時記：忘れかけている庶民史』（清文堂、一九八一年）などがあります。なお、私の手元には浅田と思しき戦後の写真が二葉ありますが、まだ断定にはいたっていません。

それから「奇陶山阿弥寺」の文字が写っている写真（写真11）は、中川黙音（第十二番）の宝物展覧会の記念写真でしょう。中川は晩年、臨済宗妙心寺派の祥龍寺（神戸市灘区篠原北町三―六―二）の地蔵堂に住みつき、寺男の仕事をしていたと、住職からお聞きしました。この地蔵堂の本尊は延命地蔵菩薩です。彼は戦後「自蔵山子守寺」（第十二番、のち第一番）と称し、子供に因むものを集めていました。そして昭和二十七（一九五二）年八月二十八日に亡くなりました。

次の写真（写真12）は鼠に関するものを集めていた藤井千鼠庵です。彼は戦後、雅楽多宗の宗員になりました。第十三番（笠に第十三番と記す）の人物（写真13）と、その次の人物（写真14）は不明です。私の手元に写真はありませんが、あと四人だけ人物紹介をしておきましょう。

音馬福蔵は屋号「傘久」というガラス店を営みながら「策之坊」という書店を開いていました[5]。昭和二十三（一九四八）年十月、彼の家（本町八〇）は雅楽多宗の「総本山」（寺務所）と称し、事務局の役割を果たしていたのです。おもしろいことに会場として使用した浄願寺を「雅楽多宗別院」と呼んでいます。

藤井治三郎は札場筋で洋服店を営み、勝部正造は阪神電鉄に勤めていたと、「大半」の永井さんのお宅で聞きました。勝部が〝切符で通う〟「吉符山加葉寺」と名乗ったことに納得しました。

（写真12）
藤井千鼠庵

（写真11）
中川黙音

（写真13）
不詳(宗員第十三号)

（写真14）
不詳

雅楽多宗のコレクションのなかで現存する最も幸せなものは、宮本圓心の土鈴です。彼は土鈴二一五〇点を檀家寺の高野山真言宗の最明寺（神戸市西区神出町東八二八）に寄贈しました。現在は最明寺郷土館に収蔵されています。

三、「西宮郷土鈴」頒布

雅楽多宗の宗員が非宗員の同好の士と土鈴の製作頒布に行なっていたことは、前述した通りです。

雅楽多宗発足時の三十三人のうち、十二人が西宮郷土鈴を製作して、昭和九（一九三四）年五月十三日に頒布しました。その趣意書、各自の鈴解説である「西宮名所風物郷土鈴　西宮　雅楽多宗」（昭和九年五月十三日）には、「（西宮雅楽多宗）創立五周年を迎へた今月たまたま五十年目に一度の氏神様の御造営竣工奉祝祭に遭遇したので何か記念の品を残さうと」したと記されています。鈴の入手を希望する者は十二人の家、すなわち十二か所を回らなければなりません。一箇所でまとめてすべてを入手することはできません。宝船の頒布と同様な方式をとりました。

（写真15-1）
澄まし顔

（写真15-2）
笑い顔

そして一同、二種類の記念写真を残しています。澄まし顔（写真15－1）と笑い顔（写真15－2）の写真です。前者を先に写したのでしょう。ところが写真には十一人しか写っていません。写っていない一人は撮影者の可能性もなくはないのですが、この二枚の写真は他の記念写真同様、プロの写真屋が撮影したと思われます。記念撮影である以上、全員が勢ぞろいするはずです。会員の誰かが撮影したならば、撮影者が交代したはずです。

これらの人物名は、前列左から、□・喜田新介・浅田柳一・永井清司・□。後列左から高山岩三郎・中川京二・音馬福蔵・多喜幸三郎・永井長兵衛・宮本圓心。高山岩三郎は鈴を頒布していませんが、記念写真に写っています。欠席者は牧百大夫（壽太郎）と中川黙音（元三郎）です。体調を崩していたのかもしれません。前列左右端の不明人物二人は、八馬壽一と田中耕花です。どちらか一人が確定できれば、もう一人も確定できます。

平成二十五（二〇一三）年十一月十日の「第百五十一回神戸土鈴友の会例会」に、私は弾正原佐和さんと共に参加させていただき、同会会員の河村和博氏が所蔵する「西宮（名所風物）郷土土鈴」の実物をつぶさに見ることができました。当時の人々の豊かな遊び心に、私の心まで温かくなりました。それらは次の通りです。

頒布土鈴

一月　神馬の鈴　八馬壽一（壽男）（製作者）阪口砂山
二月　お多福の鈴　宮本圓心（製作者）水島壽楽
三月　傀儡の鈴　牧百大夫（壽太郎）（製作者）水島壽楽
四月　満足団子の鈴　音馬福蔵（製作者）阪口砂山
五月　鯛車の鈴　喜田暉哉（新介）（製作者）水島壽楽
六月　戎さんの鈴　多喜幸三樓（郎）（製作者）水島壽楽
七月　舊砲台の鈴　中川黙音（元三郎）（製作者）水島壽楽
八月　甲子園野球鈴　浅田耕一郎（柳一は雅名）（製作者）阪口砂山
九月　鍔の鈴　名外長命（永井長兵衛）（製作者）阪口砂山
十月　燐寸箱の鈴　田中耕花（製作者）阪口砂山
十一月　特急電車の鈴　中川京二（製作者）阪口砂山
十二月　宮水船の鈴　大半菓司舗（永井清司）（製作者）阪口砂山

これらの土鈴は当日、写真撮影させていただきましたが、後日、鈴木氏からより鮮明な写真をいただきました。紙幅の関係で、二例だけ土鈴の解説文を紹介しましょう。

甲子園野球鈴の解説文には『真夏の野球戦に、東洋一の球場は歓呼の聲に揺らぐ。「打ちました・・・・球はグングン延びて居ます・・・・・アッ！」その瞬間、数萬の観衆の瞳が一斉に集まった。二塁手が、

蒼空に差し延べた左手の素描。』とあります。土鈴は二塁手のグローブです。特急電車の鈴の解説文には「大阪神戸の真ん中で　その名も高き西の宮　恵比須神社の福の神貰ひに行きませう特急で　近郊の紅葉が色づく頃、郊外電車は大童になって都会人を運んで来る」とあります。前半部分は「鉄道唱歌」のメロディーで歌うのです。土鈴は阪急電車の特急車両を正面から見た形になっています。

四、「鈴塚」建立

「西宮雅楽多宗」は結成十年記念として、昭和十五（一九四〇）年八月四日、浄願寺説教所（西宮市戸田町六―二六）の敷地に、鈴供養のための「鈴塚」を建立除幕しました。当時、戸田町界隈は遊郭街でした。「写真16」は説教所があった場所の現在の景観です。手前の駐車場から東側のマンション付近に位置したと推定できます。

建立除幕の記念写真（写真17）が私の手元にあります。前列左から永井長兵衛・□・永井清司・服部泰妙（浄願寺住職）・高山岩三郎・多喜幸三郎。後列左から□・□（宗員二十八番）・□・中川京二・音馬福蔵・宮本圓心・□。

（写真16）
浄願寺説教所付近(現在)

（写真17）
鈴塚建碑除幕式

後列右端の人物は八馬壽一か、あるいは田中耕花でしょう。

鈴塚建立除幕式当日、大型記念鈴が関係者に頒布されました。鈴塚は昭和三十二（一九五七）年十一月、浄願寺の現在地に移転されました。「写真18」は現在の浄願寺、「写真19」は現在の鈴塚です。鈴塚の裏に回ると、台石に瓦の蓋があります。すでに納められた土鈴は半ば土に返ろうとしています。鈴塚をめぐる戦後の行事については、次回お話しましょう。

雅楽多宗の宗員のなかには、宗員外の土鈴愛好家と一緒に地域の小さなグループに加わっていた人たちがいました。三つのグループを参考までに紹介します。

（一）にしのみや好観会

白鹿記念酒造博物館の「堀内戎コレクション」の中に、堀内氏が「西宮土鈴」と表書した紙箱に八個の土鈴が納められています。そのうちの四個は「にしのみや好観会」のものです。昭和十二（一九三七）年四月、七月、八月、□月の四個には、吉井良秀の和歌が浮き彫りされています。

（写真18）
浄願寺

（写真19）
鈴塚

他の四個は西宮不動山（昭和十五（一九四〇）年）・西宮　浄願寺（？）・西宮　海清寺・五十鈴会《堀川戎神社の戦前の鈴》です。浄願寺の土鈴は福箕に大黒面を付けたものです。浄願寺の土鈴には、これとは別に三面大黒小判型鈴もあります[5]。

（二）　西宮五鈴会

八馬壽一・山本魚石・米谷椒魚庵・喜田次郎・杉本丙午郎の五人が、昭和十一年（一九三六）六月七日、創立一周年記念に「西宮五景鈴」を製作しました。六角側面には「創立一周年記念　五鈴會（以下、五人の氏名）」「甲子園球場」「旧（西宮）砲台」「酒蔵」「西宮神社」「甲山」が陶鈴に浮き彫りされています。四日市の萬古焼の鈴師、初代藤井陶楽が依頼を受けて製作しました。平成二十五（二〇一三）年九月十日、「神戸土鈴友の会」は例会百五十回記念の研修会で縁（ゆかり）の地を訪ねました。酒蔵は白鹿記念博物館の酒蔵館に来られたので、私も当日、皆さんをお迎えしました。

前述したように、「西宮五鈴会」の例会が、昭和十一年六月七日と昭和十二年五月二十三日に、西宮神社境内拝殿南側茶店で行なわれたことが判明しています。昭和十（一九三五）年に始まり、いつまで続いたのでしょうか。

インターネットを検索していますと、戦前の雅楽多宗の宗員が作った土鈴に出会いました。井上三千雄の「好鈴に因る書初めの壽々」は筆・硯・墨・印鑑・印肉などなど七点セットの土鈴が箱に入っていました。浅田耕一郎の「仮名手本忠臣蔵」土鈴。永井清司の「義経千本桜」土鈴・「箸」土鈴、さらに明石焼の

小倉千尋の作による「三迷言顔見世」（自分を含めた三人の顔）土鈴などが見つかりました。また、昭和十年八月十一日の水害のため、十八日に「『夏三題』土鈴頒布会期日変更」の葉書も見つかりました。この会の主宰者は井上三千雄・山内恵舟（ともに西宮市戸田町）、そして大半菓子助・浅田柳一・宮本圓心（以上、西の宮）・阪口淳（芦屋市打出）の連名で出されています。きっと、もっと色々なものが蒐集家の手元や資料館にあるに違いありません。

（三）西の宮鈴の会

堀内コレクションの中に、『傀儡①』（西の宮鈴の会、一九三一年七月一日）という二十一頁の冊子があります（弾正原佐和氏の御教示）。創刊号で廃刊となりましたが、杉本丙午樓（光太郎）が発行者兼編輯者となっています。彼以外に、西宮市在住者あるいは雅楽多宗の宗員は冊子の中に登場しません。

五、拡がるネットワーク

西宮神社の門前町を中心とした狭い範囲の趣味人の団体であった雅楽多宗は、神戸や尼崎など阪神間からも参加者が現れ、宗員となっていきました。そして永井清司を中心に、大阪や神戸の名立たる趣味人との交流を深め、彼らの団体にも加わるようになっていきました。これまで私が調査したものを列記しますと、次のようになります。

（一）　浪華宝船会

宝船の絵は、近世から江戸では正月二日、上方では節分の日に枕に敷いて寝ると、縁起の良い夢を見て、幸運が訪れると信じられていました。宝船の会員は各自が毎年、凝りに凝ったものを作り、自宅で、遣って来た仲間に配布しました。堀内コレクションには沢山の宝船資料があります。私も五十枚ほど持っています。そして三宅吉之助関係の宝船を捜して、大阪の堀川戎神社のコレクションなどを訪ね、写真撮影をさせていただきました。そこで西宮の雅楽多宗の宗員たちの宝船にも出会ったのです。何ども「類は友を呼ぶ」「趣味のいもづる＝ネットワーク」を実感しました。この会には第三回の昭和六年にまず、永井清司が参加し、やがて仲間を引き込んでいったことが伺えます。大阪人は西宮までやって来られませんから、西宮人は大阪市内の会員に頼んで自分の宝船を置かせてもらい、頒布も合せてお願いすることになります。

昭和四年　第一回、昭和五年　第二回はともに「西宮雅楽多宗」からの参加者なし

昭和六年　第三回　永井清司　（西宮市久保町四五↓柳屋支店）

昭和七年　第四回　永井清司（大半）　「無病息災宝船」自画（西宮市久保町四五↓粕井豊誠）

松井如岑　「絵馬宝船」自画　（馬場町六三↓粕井豊誠）

中川元三郎（默介）　「六表宝船」浅田耕牛「画作」　（本町五〇↓粕井豊誠）

中山堯雄　「珊瑚宝船」長谷川小信「画作」　（安井町↓西村庄次郎）

昭和八年　第五回

永井清司　「□」□　（西宮市久保町四五↓粕井豊誠）
松井如岱　「□」□　（馬場町六三↓粕井豊誠）
中川元三郎　「□」□　（大阪市北区西堀川町五東洋司厨新聞社）
浅田印刷所　「□」□　（本町通↓芳本倉太楼）
★「浅田活版印刷所　浅田勇三郎　西宮町ノ内濱ノ町（水抜）」
（『阪神名鑑』阪神名鑑発行所、明治四十三年十二月五日）

昭和九年　第六回

永井清司　「□」□　（西宮市久保町四五↓芝谷廣志）
松井如岱　「□」□　（馬場町六三↓芝谷廣志）
浅田耕牛　「□」□　（戸田町五駒鳥茶寮↓芝谷廣志）
井上三千雄（海春楼）　「□」□　（戸田町↓中村秀好）
★海春楼は遊郭。『阪神名鑑』には見えず。
中川元三郎（堅克斎默介）　「□」（本町戎前永井民蔵方↓粕井豊誠）
「目下全国行脚中ニテ九州別府温泉滞在中」と記す。
中山堯雄　「□」□　（安井町三五↓西村庄次郎）

（二）　神戸琛交歓会

宝船の製作には多色木版摺りを駆使し、凝れば凝るほど費用がかかります。人まねではなく、仲間が

驚くようなものを作りたいと思うでしょう。大阪の趣味人たちも最初は素朴な自作品を頒布していましたが、単色よりも多色、著名な浮世絵師のような人に依頼するようになるのです。

もっと小さな栞や絵葉書なら費用はそれほどかかりません。経済的に裕福でない人でも手作りの栞で参加できます。音馬福蔵などはほとんど費用をかけない子供の工作みたいな作品ですが、永井清司や浅田耕一郎は回を重ねるごとに凝った作品となり、宝船と同様の道をたどっていきます。

雅楽多宗の宗員は大阪よりも神戸が近いこともあり、この神戸の結社に多く参加しています。『しおりのつどひ　第二回神戸栞交歓会名簿』『しおりのつどひ　第三回神戸栞交歓会名簿』に各自の蒐集品のリストが掲載されています。また、吉積栞コレクションを見せていただき、彼ら自身が作成した栞を調べました。以下の通りです。※は名称特になし。（　）内は便宜上の名称。

昭和五年□月□日　第一回…未見、従って未調査

昭和六年七月一五日　第二回…八馬壽男（壽一）「飛んだりはねたり」、音馬福蔵「長唄稽本」、永井清司「浮世は金と」（美女の写真二葉貼付け）、田中耕花「裸美」、高山岩三郎「着尺模様」、宮本圓心「お多福」、松井如岱「杵屋」、浅田耕一郎「達磨」、小林好燐「夕涼」

昭和七年七月一七日　第三回…永井清司「愛兒」、音馬福蔵「古葉書」、田中耕花「郷土玩具」、松井如岱「長唄」、宮本圓心「夏の夕」、中川元三郎「裸美」、浅田耕一郎「夫婦達磨」、八馬壽男「小判猫」、高山岩三郎「白い娘」、葛山磐冶「落し差」、小林好燐「元禄姿」

昭和八年九月□日　第四回…永井清司「□」（第三回と同様）、音馬福蔵「□」（吉積コレクションに見当たらず、筆者未見）、田中耕花「□」、宮本圓心「□」、浅田耕一郎「□」（兜の形）、葛山磐冶「□」（達磨）、小林好燐「□」（洋装の女二枚一組）

（三）　宝葉会

創作絵葉書の結社は、宝船同様に全国に沢山ありました。各自が作って交換するのです。結社の人数が多ければ多いほど一度に沢山蒐集できます。郵便で手軽に送ることもできます。

昭和七年　第一回…雅楽多宗から参加者なし
昭和八年　第二回…未見、従って未調査
昭和九年　第三回…浅田耕牛・永井清司・中山たかお（堯雄）
昭和十年　第四回…浅田耕牛・中山たかお・井上三千雄
昭和十一年　第五回…中山たかお・井上三千雄・田中耕花

（四）　ぽち袋

永井清司は何とぽち袋にも関わっていました。豊田満夫『ぽち袋―志を包む―』（京都書院、一九九八年）、再刊『ぽち袋―粋と遊び心―』（紫紅社、二〇〇三年）には、「大半」の「三福神の宝船」三十四枚揃いが掲載されています。濱田信義『名作選　ぽち袋　下』（京都書院、二〇〇〇年）には、「大半」の「福」

というぽち袋が掲載されています。

おわりに

戦前の西宮にも、遊び心に満ちた趣味人たちがいました。西宮神社（戎さん）を信仰し、地域の発展と日々の幸せを求め、生業に励みました。まったくのガラクタのようなものにも面白さを見出し、さらにそれを深めていこうとした人もいました。趣味のいもづる（芋蔓）は多様に伸びて、地域を越えて人々は繋がりを求めていったのです。何物にも代え難い内心の自由、対等な人間関係、これこそ人間社会の根底を支えるものです。

しかし戦争が激化していくと、趣味の世界にも軍事色が見られるようになっていきますが、極めて少ないというのが私の実感です。戦争は個人の内心と生活を最も踏みにじるものです。雅楽多宗の宗員たちは昭和十九（一九四四）年春まで甲子展を開催しますが、翌年には出来ませんでした。そして戦災によって彼らのコレクションは家屋や人の生命と同様に破壊焼失させられました。地域に根ざし、地域と共に生活してきた人々は、戦争を通じて、地域そして日本社会一般の問題にも眼を向けざるをえなくなっていきます。戦後、雅楽多宗は甦り、新たな活動をしていきます。自己の趣味によって、より個の世界を見つめる人もいれば、社会的繋がりをより求めていく人もいるのです。多くの人々はそのバランスの中で生きているのかもしれません。

私は、大阪の三宅吉之助が関わった千社札や（創作）玩具などにも関心があり、調査を続けていますが、「西宮雅楽多宗」の宗員のものにはまだ出会っていません。永井清司や浅田柳一などの趣味の世界には、まことに奥深いものがあるのです。

《追記》

（1）「書林かみかわ」より入手した筆者所蔵写真の全容

A「西宮雅楽多宗」関係（二十葉）※写真裏に撮影年月（一部は日まで）を鉛筆書きで記載したものあり

・記念撮影の全体写真（十四葉）

第一回宝物展覧会　昭和五年八月八日　※西宮市立幼稚園で撮影
第二回宝物展覧会　昭和六年十月十一日　※西宮市公会堂で撮影
懇親会　昭和六年十月　※西宮市役所地下食堂
第三回宝物展覧会　昭和七年十月九日　※西宮市公会堂で撮影
第四回宝物展覧会　昭和八年十月八日　※西宮市公会堂で撮影
西宮郷土鈴頒布記念　昭和九年五月十三日　※二種あり（澄まし顔と笑顔）。西宮市公会堂で撮影か
第五回宝物展覧会　昭和九年十月二十八日　※西宮市公会堂で撮影
第六回宝物展覧会　昭和十年十月二十日　※西宮市公会堂で撮影
第七回宝物展覧会　昭和十一年十月十一日　※西宮市公会堂で撮影。「西宮にお別れ記念」鉛筆書き
鈴塚除幕式　昭和十五年八月四日　※浄願寺説教所で撮影
木戸邸・だるま堂見学　昭和二十三年六月六日　※だるま堂で撮影
第十回宝物展覧会　昭和二十四年二月十一～十六日　※松阪屋四階展覧会場で撮影

懇親会　※浅田柳一が行司役　※浄願寺で撮影　高山岩三郎の生前葬か

・個人写真（六葉）
永井清司・手拭いのコレクション　※裏に「粋な湯上り姿」の青鉛筆書き
浅田柳一・ダルマのコレクション　※裏に「六、一〇」の鉛筆書き。昭和六年十月十一日、第二回宝物展覧会に出展
中川黙音・コレクション種々
藤井千鼠庵・ネズミのコレクション　※裏に「寿新春鼠の初啼」の鉛筆書き
□（第十番）・コレクション種々
□・郷土玩具のコレクション　※裏に「蒐集字のぞ記」の鉛筆書き

Bその他（七十五葉）
・個人写真（十一葉）　※「西宮雅楽多宗」の宗員が含まれている可能性もある。
・絵葉書・宝船などの複写・玩具・扇子などの写真（六十四葉）

「西宮雅楽多宗」関係写真は、開創時の三十三人の宗員の誰かが所蔵していたものだろう。現在、私が所蔵しているもの以外、他では見つかっていない。多くの宗員は西宮、阪神間に住んでいたため、戦災などでコレクションや記念写真を失なった。「西宮雅楽多宗」とは無関係と思われる写真の来歴も不明である。

(2)『記録　西宮雅楽多宗　昭和五年五月五日』の戦前の活動に関する記述

このノートは、「阪神沿線ごあんない―にしのみやの郊外生活―」展（西宮郷土資料館、二〇一五年七月十八日～八月三十日）で展示された。終了後の九月九日につぶさに調査させていただいた。ノートはA5判五十頁、途中と最後に五頁の白紙がある。昭和二十（一九四五）年八月五日深夜から六日未明にかけての西宮大空襲で、総本山（事務局）の音馬福蔵宅

に保管されていた戦前の記録集や宗印・宗旗などすべてが焼失したため、戦後、執事と称した浅田耕一郎（柳一）が自分の記憶をもとに、前半部に戦前の記録を記し、後半部にその続きとして昭和二十一（一九四六）年の例会記録を書き添えたものである。このノートの戦前部分の章立てと、戦前の記録として新たに判明した特筆すべき事項を紹介する。

前半の記録部分の章立て（便宜上、通し番号を付す）。

「西宮雅楽多宗」沿革

1本宗開創　2雅楽多宗展覧会　3甲子に関する展覧会　4住職総会　5西宮郷土鈴頒布会　6物故宗員追悼会　7戦争犠牲者　8『鈴塚』建立　9戦争勃発　10宗員の戦災　11終戦後の本宗　12本宗再発足　13追記。

1では、創立委員は高山岩三郎・音馬福蔵・浅田耕一郎・多喜幸三郎・八馬壽一・勝部正造・中川元三郎・永井清司・宮本圓心の九人、総本山を音馬福蔵宅に置くと記述。

2では、「第一回展覧会を開いて阪神在住の趣味人を驚嘆させた。而し何と云っても初めての催しであり、各自の蒐集品も微々たるもので、先輩の大家から見れば正に噴飯展であったかもしれない。」と記述しつつも、市内では好評で、西宮市役所主催の「広告意匠展覧会」「郷土みやげ品競技会」などに出品の懇請があったという。

3では、甲子展では毎年、趣向をこらした土鈴を参会者に頒布したとある。

4では、各宗員の集会や座談会、茶話会などを住職総会と呼び、警察署跡の「本町会館」を会場として年四、五回催していた。そこが八馬兼介の所有となってからは使用することができなくなり、昭和十一年から浄願寺説教所に変更した。戦前の住職会議の記録は全く残されていない。

6では、戦前に亡くなった宗員が判明する。昭和十年に木村幽名・喜田新介・牧壽太郎が亡くなったので、翌年六月九日午後八時から産所町の順心寺で追悼の会が開かれた。廣田住職の読経、宮本圓心の追悼文朗読がなされた。その後四、五年で八馬壽一・小林康治・永井長兵衛・川西空彌・松井如奏・藤飯治三郎が亡くなった。

7では、宗員の橘弥三郎が日中戦争で戦死したとある。

8には、鈴塚建立時の宗員三十人の氏名がイロハ順に列記されている。これらの氏名は鈴塚の裏面下部（台石か）に刻したとあるが、現在の鈴塚にはそのような痕跡はない。全員が結成時の宗員かどうか即断できないが、全員の氏名は左記

の通り。

井上三千雄・八馬壽一・音馬福蔵・岡田種蔵・川西空彌・勝部正造・高山岩三郎・多喜幸三郎・田中嘉美・橘弥三郎・永井清司・中川京二・南野ツタ・中川黙介・中島秋月・辻繁・山内恵舟・山本魚石・矢野倉造・松井如奏・牧金逸・古塚六八・藤井治三郎・米谷椒魚庵・小林康治・浅田耕一郎・木田新太郎・油谷新蔵・宮本圓心・浄願寺十七世正寿院代。

碑面の揮毫は大久保櫻外。裏面には「皇紀二千六百年　創立十周年記念　西宮雅楽多宗　昭和十五年五月建立」の文字が深く刻されている。

10では、空襲による宗員の犠牲者はなかったが、蒐集品を焼失した宗員の無念の思いを記している。音馬・永井・多喜・浅田・井上・勝部・中川元三郎はすべてを失なった。宮本は奥座敷のみ焼失したが、蒐集品の半数は救えた。高山は尼崎に転居していたので難を逃れたが、戦後に高潮ですべてを失なった。中川京二は蒐集品の半数と一緒に六甲山麓に疎開していた。

今回の展示品のなかに、豆本『わらんべ』六号（京都わらんべ会、昭和十八年十月）があった。それに目を通していると、「（巌谷）小波山人　遺墨展」（昭和十七年十一月二十二日）に、永井清司と宮本圓心が出席していた記録が載っている。

永井は絵画が得意で、晩年、戦災で失われた在りし日の西宮の風景画をよく描いていた。永井の絵は西宮郷土資料館に収蔵されている。いつの日か、忘れられた西宮の趣味人展が催されることを祈念する。

---

[1] 学芸員の弾正原佐和氏の御教示による。小林好燐あての葉書表には、大きな丸い記念スタンプが押されている。巨大なマストの図柄に、「日満欧亜連絡敦賀満汐線」の文字と「（昭和）11 10.16」の日付けがある。満州国牡丹江太平路六ノ九　東洋炭業株式会社出張所に当面住まい（「やどり木」）とした。翌年の昭和十二年の年賀状には、南牡丹江駅すぐ東に建立されていた「戦跡記念地」碑のスケッチ画とその解説文が印刷されている。

[2] 「ご自慢くらべ11 私のコレクション」（『大和新聞』一九五五年四月五日）によれば、浅田は戦災ですべてのコレクションを焼失させられたので、昭和十九年頃から始めていた瓦の蒐集ならば焼けることはないと思い、戦後は焼け跡の瓦などを蒐集し始めた。この記事には瓦の山を前にした浅田の写真、夫婦の瓦蒐集エピソードが紹介されている。

[3] 「阪神沿線ごあんない―にしのみやの郊外生活―」展（西宮郷土資料館、二〇一五年七月十八日～八月三十日）が開催された折に、「西宮雅楽多宗」の資料が展示された。『記録　西宮雅楽多宗　昭和五年五月五日』の小冊子、「西宮雅楽多宗」の印章などは、戦後のものである。詳しくは展示終了後に調べさせていただいた（追記（2）を参照）。さらに「戦災趣味品追憶祭」の案内書も展示された。拙稿「『西宮雅楽多

宗の鈴塚』について」の余白に、鈴木博久氏（神戸土鈴友の会会長）が、所蔵しているものを参考資料として掲載してくださった。此のたび実物を目にして、「戦災趣味品追憶祭」が戦後最初の本格的行事である番外の宝物展覧会であったことに確信を得た。宗員蒐集品も展示されたが、戦前ものと戦後のものがあった。西宮郷土資料館の館蔵品となった経過はまだすべて判明していない。同館学芸員の俵谷和子氏に御教示を得た。

[4] 浅田印刷所の場所は、飯田寿作『酒都遊観記』に掲載されている「昭和十六年現在　西宮市商店街復元図」に記されている。浅田柳一は「またまた引ツ越です」という転居通知の葉書（堀内コレクション）を、「つばくろ通信」と銘打って出している。新居を燕巣庵と称した。弾正原佐和氏の御教示による。また、柴橋明子氏（元、白鹿記念酒造博物館学芸員）は「笹部さくらコレクションより―浅田柳一氏と西宮雅楽多宗―」（『西宮文化協会会報』五五一号、二〇一四年二月）で、浅田の略歴と午年昭和二十九年の浅田の年賀状などを簡潔に紹介している。

[5] 南野武衛氏は『西宮文学風土記[上]』（神戸新聞出版センター、一九八二年）で、音馬福蔵・実蔵兄弟の事績を簡潔に記している。弟の実蔵のペンネームは実。兄のガラス商を手伝いながら『万葉集』を好んだ歌人であった。「吾妹子に　いつかしめさん　津の国の　津奴の松原に　松の樹はなし」は、「我妹子に　猪名野は見せつ　名次山　角の松原　いつか示さむ」（高市黒人『万葉集』巻三―二七九）を本歌としたものである。独身のまま、昭和二十年八月五日深夜から六日未明の大空襲で戦災死した。

松原神社（西宮市松原町）境内に、「老松之碑　昭和二年三月枯朽　高六拾尺　目通拾壱尺　年輪数四百五拾」と刻した小さな石碑が建っている。音馬実蔵は「西宮雅楽多宗」の宗員になることはなかったが、この碑は建てられた。兄の福蔵と同様に地域文化の担い手の一人であった。

[6] 「神戸土鈴友の会　第一五一回例会」（平成二十五年十一月十日）で、私は「『西宮雅楽多宗』写真史料（山内所蔵）について」、弾正原佐和氏は「堀内紊びすコレクション内にある土鈴」と題して講話した。この時の弾正原氏のレジュメによる。弾正原氏は当日のことを「いもづる～今も続く趣味人ネットワーク～」（『HAKUSHIKA』No.495、二〇一三年十二月）として報告している。